南山大学ヨーロッパ研究センター報 第27号 *pp.13-23*

歴史におけるフィクションの役割
―コルバン『知識欲の誕生』、ヴネール、ブシュロン『条件法の歴史』について―

外国語学部　真　野　倫　平

はじめに　イヴァン・ジャブロンカの問題提起

歴史と文学の関係、あるいは歴史におけるフィクションの役割は、古くから論じられてきた主題であり、歴史研究の根幹に関わる問題である。近年では、歴史家イヴァン・ジャブロンカが『歴史は現代文学である』（2014）において、史学史的な観点からこの問題を考察した[1]。同書によれば、古代以来、歴史と文学は曖昧な関係を続けてきた。十九世紀前半にフランスで近代歴史学が誕生したとき、そこにはナショナリズムを基盤にした文学と歴史の生産的な競合関係があった。しかし第三共和政下の実証主義の時代、大学において歴史の制度化が進むと、歴史家は自らの科学性の条件として文学性を切り捨てるようになる。こうして今日にいたる歴史と文学の対立が始まる。二十世紀のアナール学派は、自らの科学性を標榜するあまり、自らの文学性を強調しようとはしなかった。やがて起きた言語論的転回は、歴史のナラティヴに対する関心を高めたが、歴史をテクストとして扱うその姿勢は「歴史は物語にすぎない」という懐疑論を呼び覚ますことになった。その後、「歴史と記憶」をめぐる論争が盛んになると、物語論は危険な修正主義につながるものとして警戒の対象となった。今日、歴史は科学と文学のあいだで一種の袋小路に陥っているかに見える。

ジャブロンカはこのような閉塞状況を打破するために、歴史叙述に文学的要素を導入することを提案する。たとえば「方法としてのフィクション」という概念――それは単なる空想の産物ではなく、歴史研究において方法論的に用いられる論理的虚構を指す。「フィクションはそれ自体では虚偽でも真実でもない。フィクションは、自分が自足していると考えるかぎり、真実と関係を持たない。フィクションは、現実を再現することで満足するかぎり[…]、真実と不完全な関係しか結ぶことはできない。[…]反対に、フィクションは、知識の操作者として知の生産のプロセスに加われば、真実

1　『歴史は現代文学である』については、拙論「イヴァン・ジャブロンカと歴史記述の問題について」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第24号、2018年3月、51-62頁を参照。

と関係を結ぶことができる[2]」。彼はこうして、フィクションという概念にこびりついた非科学性のコノテーションを一掃し、それを歴史叙述を刷新する道具の一つにしようとする。

あるいは「方法としての私」という概念――それは歴史家の調査の過程そのものを読者に開示することである。アカデミズムの「われわれ」が偽りの中立性を自任するのに対し、「方法としての私」は、歴史家の立場や利害関係をあらわにすることで、歴史の方法について反省をうながす。「『私』を用いることは、書法の選択である以前に、認識をめぐる自由である。われわれは、結果としての歴史よりも――科学的な理由により――プロセスとしての真理を、つまり合理的で説明可能で修正可能なやり方を好む[3]」。また、研究の過程を可視化することは、歴史研究を民主化することにもつながる。

ジャブロンカはこうして、『私にはいなかった祖父母の歴史[4]』（2012）において、アウシュヴィッツの強制収容所で亡くなった祖父母の生涯と自らの調査の過程を並行的に物語る、独自のスタイルを確立した。さらに『歴史家と少女殺人事件　レティシアの物語[5]』（2016）においては、この試みをさらに押し進め、十八歳で殺害されたレティシアの生い立ち、殺人事件の捜査の進展、自らの調査の過程を断片化し再構成するという手法を取った[6]。

1　歴史学の新たな挑戦

以上のようなジャブロンカの理論と実作の両面にわたる試みは、近年の歴史学において書法の革新の機運が高まっている状況を反映している。彼が『歴史は現代文学である』で指摘しているように、二十一世紀になって、さまざまな歴史家が従来の歴史

2　Ivan Jablonka, *L'histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*, Seuil, 2014, p. 211–212. 邦訳はイヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である　社会科学のためのマニフェスト』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018年、175頁.

3　*Ibid*, p. 295. 邦訳、248頁.

4　Ivan Jablonka, *Histoire des grands-parents que je n'ai pas eus*, «Points Histoire», 2013. 邦訳はイヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかった祖父母の歴史　ある調査』田所光男訳、名古屋大学出版会、2017年。

5　Ivan Jablonka, *Laëtitia ou la fin des hommes*, Seuil, 2016. 邦訳はイヴァン・ジャブロンカ『歴史家と少女殺人事件　レティシアの物語』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2020年。

6　『歴史家と少女殺人事件　レティシアの物語』については、拙論「歴史家の目がとらえた三面記事事件―イヴァン・ジャブロンカ『レティシア』について―」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第26号、2020年3月、63–74頁を参照。

記述の枠を破った作品を生み出している。「十五年ほど前から、特定の研究空間においてではなく、過去や現在の世界を書くやり方において、多くの自発的な試みがなされてきた。［…］それは、さまざまなアプローチや、さまざまな形式や、いくつかのタイプの論理を混ぜ合わせて、過去と現在に別のやり方で取り組むための選択である[7]」。具体的には、アラン・コルバン、フィリップ・アルティエール、パトリック・ブシュロン、ドミニック・カリファ、シルヴァン・ヴネールなどの歴史家が、内容のみならず形式において興味深い試みを行っている。

たとえばフィリップ・アルティエールは、ドミニック・カリファとの共著『女性殺害犯ヴィダル[8]』（2001）において「社会的伝記」biographie socialeというジャンルを創造した。それは、現代の歴史家の言葉を一切交えずに、ヴィダル本人および同時代の関係者の言説をコラージュして伝記を創るという実験的な試みだった。そこには、伝記作家としてふるまいながら「伝記という幻想」を葬り去ろうとする批判的な意図が込められていた。

アルティエールはまた、「歴史ゲーム」と題されたいくつかの著作において、独自のゲームの規則を設定し、それを実践した結果を公表している。『ベルトラン文書[9]』（2008）では、五人の歴史家（フィリップ・アルティエール、アンヌ＝エマニュエル・ドマルティーニ、ドミニック・カリファ、ステファヌ・ミショノー、シルヴァン・ヴネール）が共通の資料を研究し、その成果を二十ページほどの報告書として持ち寄り、それを一定の規則に従って読み進め、最終的に得られた結果（断片化された五人のテクストのコラージュ）をそのままのかたちで刊行する。この歴史ゲームは、他愛のない偶然の遊戯のように見せながら、歴史における重大な問題――歴史家の主観性のはたらき、歴史研究への偶然の介入、資料とテクストの相違など――を提起している。

また、アルティエール『再現[10]』（2013）では、歴史家が過去の一事件を取り上げ、カメラの前で自らその場面を演じ、撮られた写真をもとにフォト＝ロマンを作成する。具体的には、1925年に殺害されたある神父（歴史家の曾祖伯父）の殺人事件を、アルティエール自身が神父の役を務めながら再現する。この奇妙なパフォーマンスは、過去の事件の稚拙な模倣にすぎない。しかしそれを歴史家の仕事のメタファーととら

7　Ivan Jablonka, *L'histoire est une littérature contemporaine*, p. 315. 邦訳、266–267頁.

8　Philippe Artières, Dominique Kalifa, *Vidal, le tueur de femmes. Une biographie sociale*, Verdier/poche, 2017.

9　Philippe Artières, Anne-Emmanuelle Demartini, Dominique Kalifa, Stéphane Michonneau et Sylvain Venayre, *Le dossier Bertrand. Jeux d'histoire*, Manuella éditions, 2008.

10　Philippe Artières, *Reconstitution. Jeux d'histoire*, Manuella éditions, 2013.

えるならば、その稚拙さそのものが歴史研究の不確実性や偶然性を開示することになる。

次に、歴史家の自己省察をいくつか取り上げよう。ピエール・ノラは『自己史に関する試論[11]』（1987）で、歴史家がおのれ自身の経歴を振り返る「自己史」ego-histoireというジャンルを創始した。パトリック・ブシュロン『歴史家を職業とする[12]』（2011）は、自己史の新たな試みであると同時に、それに対する批判的考察でもある。ブシュロンはそこで、現代の歴史家が自己史という制度を無批判に受け入れている現状を批判し、新たな書法を創造することで歴史ジャンルを刷新することを呼びかける。

シルヴァン・ヴネール『失踪者　シルヴァ・ヴネールに関する調査[13]』（2012）は、失踪した歴史家自身を捜査するという架空の設定を取っている。ヴネールはブシュロンの批判を受け継ぎ、自己史というジャンルにフィクションを導入することを試みた。このフィクションによる自分探しは、歴史家の自己省察のメタファーであると同時に、その可能性と限界を見きわめる試みでもある。ヴネールはここで、「自己史」と「史学史」という制度そのものを批判し、歴史家の自己省察の射程と限界を追究する。

本論では、これらのさまざまな試みのうち、アラン・コルバン『知識欲の誕生』、シルヴァン・ヴネール、パトリック・ブシュロン『条件法の歴史』の二点を取り上げる。この二冊は、歴史家によるフィクションの創作の実践例であると同時に、歴史におけるフィクションの役割についての考察でもある。

2　コルバン『知識欲の誕生』

アラン・コルバンは『知識欲の誕生』（2011）において、リムーザン地方のモルトロールという小村の小学校教師ボモール氏が行った講演会を再現しようと試みた。コルバンの手にあるのは十回にわたる講演会のタイトルと、その日付、出席者の男女別の人数のみ。講演の原稿は残されていないので、コルバンはボモール氏の経歴と当時の村の状況を総合的に考慮したうえで、講演の内容を想像力によって創作した。

コルバンは序論において、同書は「オリニ＝ル＝ビュタンの木靴職人、ルイ＝フラ

11　*Essais d'ego-histoire*, Maurice Agulhon, Pierre Chaunu, Georges Duby, Raoul Girardet, Jacques Le Goff, Michelle Perrot, René Rémond, réunis et présentés par Pierre Nora, Gallimard, 1987.

12　Patrick Boucheron, *Faire profession d'historien*, Publication de la Sorbonne, Collection «Itinéraires» - 8, Nouvelle édition, «Points Histoire», 2016.

13　Sylvain Venayre, *Disparu! Enquête sur Sylvain Venayre*, Les Belles Lettres, 2012.

ンソワ・ピナゴについてかつて行った調査を継承する[14]」ものだと述べている。彼は『記録を残さなかった男の歴史』（1998）において、文盲の木靴職人ピナゴ――「自分が生きた痕跡」を残さなかった者――を忘却の淵から拾い上げようと試みた。しかしその目的は、ピナゴという一人の人間の個人史を作ることというよりも、彼が生きた状況そのものを再構成することにあった。「私はこれから、彼の立場に身を置いて――彼は不在であるかもしれないが――、彼の眼差しを想定しながら一枚の絵を描こうとしているわけだが、その絵の中でピナゴは、われわれにとって、たどり着くことのできない中心、絵の中の、見えない点となるだろう[15]」。原書タイトル（『ルイ＝フランソワ・ピナゴの再び見出された世界』）が示すように、歴史家が再び見出したのは、ピナゴ自身ではなく、彼を取り巻く「世界」そのものなのだ。

『知識欲の誕生』でコルバンはさらに一歩を踏み出す。すなわち、無名の一人物が生きた世界を理解したうえで、その人物が行った講演を文字通りのフィクションとして再現するのだ。同書は十五の章から構成され、うち十章が講演の再現に、五章が著者による解説に当てられる。解説の章においては、講演者がいかなる身分でどのような価値観を抱いていたか（第1章「講演者・ボモール氏はどんな人物か」）、あるいは聴衆がいかなる階層・職種・性別に属していたか（第2章「聴衆はどんな人々だったか」）など、講演会を取り巻く「世界」について説明がなされる。講演の章（講演の演題が章題となっている）においては、以上の「世界」を踏まえたうえで、講演の内容が想像力によって再現される。

つまり同書は、ボモール氏を取り巻く「世界」から逆に「個人」を再構成しようとする試みであり、その意味で『記録を残さなかった男の歴史』と相互補完的な関係にあると言ってよい。そのかぎりで同書もまた、原書タイトル（『モルトロールの講演会』）が示すように、ボモール氏個人よりも、講演会の聴衆たちが生きた「世界」そのものを再構成する試みといえるだろう。「とはいえ、本書が対象とするのはボモール氏ではない。［…］だが、彼の功績によって、われわれは冬の寒夜に彼の話を聞きに集まった無名の人々の知識欲を想像してみることができるのだ[16]」。

十回の講演の中から、ここでは特に第12章「フランスの植民地建築――アルジェ

14　Alain Corbin, *Les Conférences de Morterolles, hiver 1895–1896. À l'écoute d'un monde disparu*, Champs histoire, 2013, p. 13–14. 邦訳はアラン・コルバン『知識欲の誕生』築山和也訳、藤原書店、2011年、15頁.

15　Alain Corbin, *Le monde retrouvé de Louis-François Pinagot*, Champs histoire, 2016, p. 13. 邦訳はアラン・コルバン『記録を残さなかった男の歴史』渡辺響子訳、藤原書店、1999年、19頁.

16　Alain Corbin, *Les Conférences de Morterolles*, p. 9. 邦訳、11頁.

リア、チュニジア、スーダン」（第8回講演）を取り上げよう。ここでボモール氏は、アフリカにおけるフランスの植民地拡大について、そこで植民者がぶつかったさまざまな困難と、それを克服するために発揮した愛国的な献身について物語る。そこではフランスが未開の地にもたらした慈善――ヨーロッパ文明をもたらして野蛮な風習を廃し、科学の進歩によって疫病を撲滅したこと――が何よりも強調される。「それらを読むと、植民地拡張の道徳的意義がよく分かります。［…］実際、まず第一に慈善的であるからこそ、フランスは本当の意味で植民地支配者、文明の導き手となることができるのです[17]」。こうしてフランスの植民地開拓の正当性を熱烈に訴えるボモール氏の言説には、典型的な植民地主義のイデオロギーが刻印されている。

続く第13章「聴衆が植民地について知っていたこと」は、コルバンによる解説の章になっている。彼はここで、植民地を主題とする第3章と第12章についてこのように説明する。「もうお分かりだろうが、二回の講演は、植民地開発をフランスの歴史、文明化の使命、愛国心、国民感情と結びつける、そのような広報活動の一環として位置づけられる[18]」。コルバンはここで、当時の聴衆がいかなる手段で植民地開発に関する知識を得ていたかを説明し、〈植民地協会〉などの圧力団体や、『図説アリアンス・フランセーズ』などの刊行物の役割を指摘する。「今や植民地思想の流布は圧力団体が担っており、一貫性と影響力のある広報活動は、その分野における有効な文化の仲介者たらんとしたモルトロールの小学校教師にも及んだ可能性がある[19]」。実際、第12章のボモール氏の講演の中ではこれらの団体や出版物の名が引用され、講演者がそこから知識を受け取ったことが示唆される。もちろん、この講演自体がコルバンによる創作であるから、ここではボモール氏の陰でコルバン自身が歴史家として書誌情報を提供していると考えることができる。

その意味で、『知識欲の誕生』においては、フィクションの章と解説の章が互いに補強し合う関係になっている。そこでは、解説が講演の背景を解き明かすと同時に、講演が解説の具体例を提供するのだ。コルバンはこのような二重の構造を通じて、歴史に埋もれた人間の内的世界を再構成するとともに、この時代に民衆の内に生まれた知の欲望と、それを活用する巨大なイデオロギー装置の存在を明らかにする。

17　*Ibid*, p. 146. 邦訳、138頁.

18　*Ibid*, p. 163. 邦訳、155頁.

19　*Ibid*, p. 160. 邦訳、152頁.

3　ヴネール、ブシュロン『条件法の歴史』

コルバン『知識欲の誕生』は刊行されるやいなやさまざまな反響を引き起こした。シルヴァン・ヴネールとパトリック・ブシュロンの共著『条件法の歴史』（2012）もその一つである。それは不思議な歴史書で、2058年に起きたある事件の関連資料という、フィクションの設定を取っている。「われわれが本書に集めたアルシーヴは例外的なものだ。というのも、それは、この職業の慣例とは反対に、過去ではなく未来のことを教えてくれるからだ[20]」。その事件とは、2058年の歴史のアグレガシオン（教授資格試験）の課題文に、十九世紀末の小学校教師の講演のテクストが出題されたが、後になってそれが二十一世紀初頭の歴史家の手になる偽作だと判明したというものである。言うまでもなく、その課題文こそ、コルバンの手になるボモール氏の講演（『知識欲の誕生』第12章「フランスの植民地建設」の一節）にほかならない。

実際、2011年の歴史のアグレガシオンの試験において同じような事件が起きている。出題者が十五世紀のテクストとして提示した文章が、後になって近代の学者の手になる偽作――具体的には、中世史家パレモン・グロリューの著書『コンスタンツ公会議日誌』（1964）の一節――だと判明したのである。グロリューは同書の序論において、まずそれをジャック・ド・セリジー（ジャン・ジェルソンの秘書）が残した手記として引用するが、数ページ先になってそれが自分の創作だと告白している。アグレガシオンの出題者はそこを見落とし、テクストを十五世紀の真正な史料として扱ったのだ。

『条件法の歴史』は、2011年のアグレガシオン事件と、同年に刊行されたコルバン『知識欲の誕生』に触発されて書かれたものであり、これらに対する二人の歴史家の批判的考察になっている。全体の構成は、刊行者たちの「前言」、第1章「主題」（2058年のアグレガシオンの問題および課題文）、第2章「フォーラム」（試験後のウェブ上の掲示板でのやりとり）、第3章「書簡」（事件の関係者の書簡）、第4章「注」（「2012年にパトリック・ブシュロンとシルヴァン・ヴネールが作成」）となっている。つまり主要部分である第1章から第3章は、語り手による統一的な「叙述」ではなく、事件の関連資料が並ぶ「アルシーヴ」のかたちをとっている。また、表題には「学生用テクストおよび資料」という副題が付され、教科書風の体裁になっている。

九十代の老歴史家パトリックは手紙の中で2011年の状況を回想する。この年、ア

20　Sylvain Venaire, Patrick Boucheron, *L'Histoire au conditionnel. Textes et documents à l'usage de l'étudiant*, Mille et une nuits, 2012, p. 12.

ラン・コルバン『知識欲の誕生』が刊行され、歴史家のあいだで歴史とフィクションをめぐる議論が巻き起こった。「フィクションの境界で戯れることは、歴史の真実の体制を危うくする、われわれは絶えずそう言われたものだ。とんでもない、その正反対だ、とわれわれは答えた。文学の力を見損なうときこそ、図らずもその犠牲になってしまう危険が常にあるのだと[21]」。パトリックはこうして、歴史における想像力の重要性を説き、シルヴァンに対して戯れにこの問題について考察することを提案する。

パトリックは、2011年のアグレガシオン事件がいかにして起こったのかを解明しようとして、中国の泥棒の寓話を例に挙げる――その泥棒は、陳列台の上の商品を少しずつ動かしてゆき、主人の目が届かなくなったところでようやくそれを盗むというのだ。1964年に架空の手記として提示されたものが、2011年のアグレガシオンで真正な手記になりおおせるまでに、同じような事情があったのではないか。つまり、グロリューの本が歴史教育に便利な教材として歴史教師のあいだに次第に浸透し、そのことに慣れた教師たちが内容を深く検討しないままそれを使用したのではないかと。

彼はまた、問題のテクストの特徴についてこう分析する。

> 「コンスタンツ公会議の目撃証言」と題されたその史料は、教会史のこの重要な瞬間についてわれわれが知っていること――つまり今日真実と思われていること――を、中立で見通しのよい滑らかな視点から、事実の細部にいたるまできわめて忠実に、描写している。われわれがコンスタンツ公会議について教えるのとほぼ同じような物語、論証、価値観に従って、それを語っている。だから非常に優れたテクスト、あるいは非常に悪い資料なのだ[22]。

「優れたテクストにして悪い資料」とはどういうことか。それは、歴史的状況を客観的に無駄なく説明した「優れたテクスト」である。しかし、それは現代の歴史家だからこそ書きえた文章であり、現実の歴史的資料はそのようなものではありえない。歴史のさなかを生きる人間は時代に対してそのような透徹した視線を持ちえず、彼が書く文章には時代の激動がもたらすノイズやぶれが刻印される。しかしだからこそ、それは時代を伝える真正な資料たりうるのだ。そして、そのようなノイズのないこのテクストは、資料としての真正さを欠いた「悪い資料」ということになる。

パトリックが仕掛けたこの歴史ゲームを、八十代の老歴史家シルヴァンが受けて立

21 *Ibid.*, p. 88–89.

22 *Ibid.*, p. 92.

つ。「あなたは遊べと言われる。よろしい、遊びましょう[23]」。そこで彼は、2058年のアグレガシオンの課題文（コルバンの手になるボモール氏の講演）が十九世紀末の小学校教師の文章ではありえないことを証明できると主張する。「事件のずっと後になって書かれたテクストは、著者がどれほど聡明で慎重であろうと、事件と同時に書かれたものと同じではありえない。そのことを私は証明したい[24]」。シルヴァンによれば、コルバンはこの講演を創作するにあたり、二つの誤謬――事実に関する誤謬と文体上の誤謬――を避けようとし、そのかぎりでほぼ完璧な仕事をなしとげた。にもかかわらず――あるいはだからこそ――これらの講演は十九世紀末の小学校教師の作ではありえない。なぜならその講演の陰には、現代の歴史家が隠れているからだ。具体的には、1）原資料の引用、2）年代の記載、3）歴史的知識の使用、4）目的論的な説明、5）時代精神の造形、などにそのことがうかがわれる。最後の点についてのみ説明すると、小学校教師ボモール氏はまさしく十九世紀末の「時代精神」――共和主義や植民地主義のイデオロギー――を体現する者として造形されている。そのことの代償として、そこには個々人が持つはずの個人としての特異性が消されてしまっている。

> これこそがあらゆる捏造に認められる問題である。一般から個別を導くとき、それは歴史家が行う経験的な方法とは逆の手続きを取る。逸脱、変異、意外性を排除するのだ――つまり、私にとって日々大切さを増す言葉を用いれば、生命を。歴史家が、予期していなかった論理や、感情や、立場に驚くとき、生命は古い資料からあふれ出る。あなたも同意してくださるだろうが、この驚きが最初のひらめきとなり、そこから――歴史家がそれをうまくつかまえれば――新しい知識の炎が生まれるのだ[25]。

シルヴァンはさらに、2058年のアグレガシオン事件に対する受験生たちの反応を分析する。第2章「フォーラム」には2058年のウェブ上の掲示板に投稿されたさまざまなメッセージが掲載されている（それらは実際には2011年のアグレガシオン事件のさいにウェブ上に投稿されたメッセージを一部改変したものである）。老歴史家はそれらを検討したうえで、2058年の――同時に2011年の――アグレガシオンをこう総括する。

23　*Ibid.*, p. 104.

24　*Ibid.*

25　*Ibid.*, p. 119–120.

今年のアグレガシオンの受験生たちが、課題のテクストを読んで当惑した理由はよくわかる。彼らは歴史家の仕事をするよう求められた（あくまでテクスト解釈をさせるためのフィクションであるが）。ところが同時に、それを行えないような資料を提示されたのだ。［…］彼らが本当に仕事をするためには、ボモールが理念型以外の何物かでなければならなかった。善良な教師がミスをし、年代を間違え、資料に不自由し、未来について愚劣な予測を立て、党派的で、不公平で、隠しごとをし、嘘をつくようでなければならなかった[26]。

ボモール氏の講演は、同時代を説明するための資料としてはあまりにできすぎており、歴史家が取り組むべき障害としてのノイズが存在しないのだ。先ほど述べたように、『知識欲の誕生』においては、フィクションの章と解説の章が相互補完的な関係にある。そこでは、個人は世界を集約し、世界は個人のうちに反映される――この予定調和的な関係を維持するかぎり、ボモール氏は小学校教師の典型であらねばならず、特定の個性を持つことはできない。その意味でこれもまた、パトリックの指摘する「優れたテクストにして悪い資料」であると言える。しかし、ヴネールとブシュロンは、それを2058年に起きた事件の「アルシーヴ」に置き直し、別の角度から光を当てることで、歴史家にとって資料とは何かという問題を考えさせるための材料とした。彼らはこの作業を通じて、それを新たに解読すべき「よい資料」に生まれ変わらせたと言えるだろう。

おわりに

コルバン、ヴネール、ブシュロンの試みは、歴史家のフィクションに対する隠された欲望をあらわにする。それは歴史的認識の限界に直面した歴史家の逃避なのか、あるいは文学的誘惑に身を委ねた歴史家の逸脱なのだろうか。むろんそのような側面もあるだろうが、そこに込められた認識論的な意義を見落としてはならない。コルバンはフィクションを通じて、歴史に埋もれた人間の内的世界に迫ろうとした。そしてヴネールとブシュロンは、コルバンのテクストをフィクションの次元に置き直すことで、新たに解読すべき資料としての価値をそれに付与しようとした。これらはいずれも、歴史にフィクションを導入することで、新たな知の地平を開こうとする試みなのだ。そして、それが高い遊戯性、一種のゲーム感覚をもって行われている点に、フランス

26 *Ibid.*, p. 120–121.

における文学と歴史学の真に生産的な競合関係を認めることができるだろう。

付記

本論文はJSPS科研費19K00510ならびに2020年度南山大学パッヘ研究奨励金I-A-2の助成による研究成果の一部である。